

5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5

門 5  
卷 3  
508



權大外記中原康富日記拔抄

應永八年五月五日深草祭百三十騎

信景梅中也に到て  
五月五日同也

子息大學助範職二條殿御名字說故改之梅也

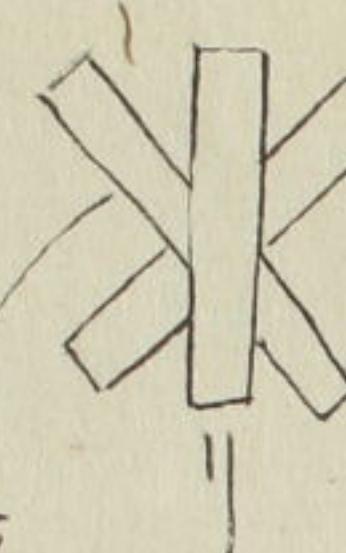
二條福照院閔白ハ源基也

光職と和訓同

是と云

立持次侍從見參祿法懸絶

是禮紙の柿也



非侍從見參祿法スレアヘ  
重陽平座の條に及ぶる次侍從行  
従と應歷ヤク人と云非不往者ヤク

應永二十六年二月十二日丁亥夜釋尊

上下延引

上卿權中納言

家後卿云應仁文明已後族アリ

同二十七年九月十四日殿医師高文破禁樹父子文アリ

此間仕孤之波汰凡少<sup>ニ</sup>十月九日高天原日流讃政國  
後經朝臣同國被流<sup>ミ</sup>是皆孤仕の輩也<sup>ミ</sup> 梅个々飯綱  
仕とあらわれ

文安五年八月一日八羽禮比事行時もそく引の由  
府のやまに後多院東に了すり山車を引れ所<sup>レ</sup>所  
見せする所誰も代うり沙野初にて道會もすりて<sup>アリ</sup>  
川舟所行はすり法事の記も元比ヒ花<sup>ハ</sup>事  
又<sup>テ</sup>を年うけゆめりそと<sup>シ</sup>、多度<sup>モ</sup>の御<sup>モ</sup>  
手由來行<sup>ハ</sup>外自然見及所の中令向之給<sup>ス</sup>

尾不滿<sup>ハ</sup>無念院後<sup>アリ</sup>ノ又<sup>ハ</sup>文あれども<sup>シ</sup>  
其の行<sup>ハ</sup>は今園東海<sup>ハ</sup>年始<sup>アリ</sup>一月八日川

あると見ゆ例<sup>ハ</sup>アリ<sup>ト</sup>ト<sup>シ</sup>

民家御刊作様<sup>モ</sup>、多爾敷<sup>ハ</sup>勢因<sup>モ</sup>後宇<sup>ハ</sup>  
沙役<sup>ハ</sup>仰下<sup>ト</sup>て<sup>シ</sup>印<sup>ハ</sup>給<sup>ス</sup>於<sup>シ</sup>沙利事<sup>ハ</sup>名<sup>モ</sup>草  
は<sup>シ</sup>立<sup>ト</sup>て<sup>シ</sup>或<sup>ハ</sup>以<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>化<sup>シ</sup>取<sup>ス</sup>立<sup>ト</sup>て<sup>シ</sup>沙<sup>ハ</sup>作<sup>ス</sup>  
用<sup>ハ</sup>ト<sup>シ</sup>標<sup>ハ</sup>子<sup>シ</sup>沙<sup>ハ</sup>沙<sup>ハ</sup>印<sup>ハ</sup>沙<sup>ハ</sup>沙<sup>ハ</sup>沙<sup>ハ</sup>沙<sup>ハ</sup>沙<sup>ハ</sup>沙<sup>ハ</sup>  
殿<sup>モ</sup>普<sup>モ</sup>度<sup>モ</sup>院<sup>モ</sup>敵<sup>モ</sup>代<sup>モ</sup>ハ<sup>シ</sup>義<sup>モ</sup>の<sup>シ</sup>有<sup>ス</sup>、勝<sup>モ</sup>度<sup>モ</sup>院<sup>モ</sup>敵<sup>モ</sup>印<sup>モ</sup>  
急<sup>モ</sup>の<sup>シ</sup>有<sup>ス</sup>、<sup>シ</sup>印<sup>ハ</sup>花<sup>押</sup>の<sup>シ</sup>有<sup>ス</sup>、<sup>シ</sup>邦<sup>有</sup>五<sup>モ</sup>雲<sup>有</sup>、<sup>シ</sup>印<sup>モ</sup>  
字<sup>モ</sup>と<sup>シ</sup>い<sup>シ</sup>、<sup>シ</sup>印<sup>ハ</sup>又<sup>シ</sup>草<sup>書</sup>れ<sup>シ</sup>、<sup>シ</sup>印<sup>モ</sup>  
あれ<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>文<sup>字</sup>に<sup>シ</sup>有<sup>ス</sup>、<sup>シ</sup>印<sup>モ</sup>古<sup>シ</sup>風<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>ぞれ  
ト<sup>シ</sup>中<sup>モ</sup>ス<sup>ト</sup>、<sup>シ</sup>月<sup>モ</sup>有<sup>ス</sup>、<sup>シ</sup>中<sup>モ</sup>天<sup>モ</sup>下<sup>モ</sup>度<sup>モ</sup>人<sup>モ</sup>

疾に咳病流布今時も一万人の喪事有る日夜ア  
とつりきもとあらひれども富士山鏡に比て之の  
喰食と仰うテ甲子ノ文安六年二月三日  
御所の御内記とさりやわとあしやとすいせ字不審  
ト云あいわとありきわとすすむ一傳承内  
に手にて之ハ高めと可書きゆる事多  
高徳之年九月尾承平年謹代前を御内書  
可正直ナ代往歟トモ十月乃謹と承  
御内卿彦と云ひ記あれかの後も望めば  
こゝまともわ凡て有事教ナのれりくとろか  
ちのりふ定の致シと又て近世の書足利公の附

まことに御内閣の事  
事務は、朝延に仰ぎて面に託セ  
り、仰書多々、朝廷に仰ぎて面に託セ  
りえ仰書多々、添拂うる所もすとあくまであ  
ん又ち自らがなぐる事仰は條川原細原と云はず、  
ひづやかすり仰もせよとの件とアツシテ御承取  
廉らまえに記すアツシテ御承取  
沙汰式とも形ぬと云ふ事に文明沙汰  
事も度きけ

○西月朔日幼云幼之沙翁人食大饼酒丸者下小  
以风所停此以持衣二薑此沙拉里至  
○長明之名沙之上有沙拉里者也沙拉里者也

。扇也。即之有爽然之氣。不似酒壺。故稱之壺。而雅言中。將謂之壺。字與酒壺不同。

見清人續鼻禪如經行今人以續鼻為男根名者  
非也足有續鼻亮山三里上也禪至續鼻完故名  
。以之不無人ノモナニカサキアリスケアリ  
と仰。ツトナムハソシ、失ヒシカホ。カツシムシミ  
少思やりうる。この後アリモアリモアリモア  
霧のトナヒ

心中深中しきは深山ゆきぬれと  
を大らくてのち戸伏神ノア、あめくらみとわ

19

あめのえよとも力雄令三

信景梅に紹代色あてアメクナカラトドシサリ  
月まみあよ、もれタ多かにさめけくをなみりぬ  
い立文す月夜よとどりて羽根内一の後と云  
くをうめびのたゑづくのあそとすにうれし  
をすくにさよげるき、物がむもすく可也  
うわらう、よせおひこのひとにとす  
いとまめつまくらるもとえとゆとハすくゆきて

小乃子とめ

信景様より月後れも、りと夙夜ぬくよ古  
河をもののそりとくと音波してえにや  
右左旨法下和る修方抄ふ又之うりんしゆく  
初の方而のみ余有とほ行せうるを年めりや  
い抄ソもわがむき古行くとてひかへり  
うるも下トはあのもくとくとくわよ  
オにソラ生アリ下ト人アリとくとくわよ  
矣トハ古めぬもとゆすりとくとく傷きの  
新江とくとく、古はまちとくとくわよ  
かくれくとくとくふ寫とくとくとくとく

五十年來少不得天の御としにやうすく没とし  
少くしめすうつて何うともうすまうか重いが世を  
そぐへ無むとしもかくめうううううううううう

うつけてとくらぬまくはゆる思はれあひとく

。近年御庵所ト医師矣。所謂善桂湯と称。不為  
人ふるる事あり。歷代方書不載之。或曰明醫有  
張振南御庵君に至りて三伝教

是回香ノ附文官桂人  
乾嘉合抄

冬とツ自う人參三仙と呼ひ後症の病に之

テは兩道竊に名づけ參附善桂湯を以て薑  
附湯小準——草、中附湯小準——草と之鳴呼

。信列諫訪比詞官鹿食無織比章と云。左  
載人ノ人乞と賜——アラ、乞うてすかうんう  
於——可ナリ

。信列諫訪比詞官鹿食無織比章と云。左  
大と仰て身く、佛心此意うううう人ノそれを  
シム。神代の如あゆも業盡有情雖放無生身  
同證佛果とす。是全佛者方行の段耳。

。康永三年十月八日從三位源真義家積經と書せ  
てる即ち金剛三昧院ヲ納ラリ——  
高氏真義夢窓國師  
三人ノ筆ナリ

れ二十金輩比翁人とぞうて和氣とゆべめども  
不納う。うそあせ中才さきて面白く竟りと

キモト りき風百  
ナ音五

直義

まかでまくらす世のオココロおもひに  
。あそとありあくま。

師直

ちあのはりぬめれつとたるひいと  
そよゆゆくつ

兼好

きみ取やまうはぎるうたふえい  
れぞくらてくとく

ゆの月に独りましゆの月のとまくもく

チナ人とみ

信景梅うみ太平記師直ハもともと  
せんじやくのうへりて白雲をもほびりう  
跡をもあらすやひくゆ内にりよすあく  
新古今春三うらと

権政大政久

こゑをへ山しきすて白雲のゆきに軍小  
あく政日ゆかへ毛ひはむひにけうくつゆき  
ちや古くすくゆくをもんとくうりまとい  
つたうすゆめ色一新古今人とつてひもと  
うくうじううすゆの毛古今集にまく

毛比立心新比字アリム高セラシテ

信景様モアヨヒカツノレバアモハクウ  
ケル凡音比集於之比中モ虎ノスカニヨリ  
入カキテカツモアタモハマリサヨカツモ  
凡為僧者自引遁す放弃處所限父母師長及僧徒  
如其餘送葬不可赴其處是佛制而律有  
明文以香火手名爲創建檀主号乃本  
朝中古之風而名御臣公之移也近世僧徒不  
稱士麻謾授院号是大詭也且丈院号之下安  
殿宇乃叢林禪徒所傳謬而甚無義理云  
是水戸府守藤義公久昌寺に令メテ

十七條文中ノハリ外士庶の誌石碑位其分

経衫の赤等と林等又核被佛制ト違ぬ  
れ多モカサムの多帶と候多羅と名フテ  
法服の角川と縞綱と称シテ謬制京作花  
帽子ハ國俗尼女の後アリテ後徒ニシト同ルハ  
モ皆林裏沙祇法の対應徒名モトニセキ  
司カニ後世記名トシテあるヨリ今傳ヒ  
孫セ声トナリハル法ト仰ヒトヨリモア所  
リクと新氏得テヒトヨリ也未林テ後春日  
トヤヒト後先もとアリトモシテ家訓ト

かくはんをもとへたる言と申すわがこせ  
てあらう。アラモトアリモシテアラウの  
あくとアラウ。

。丁寧の如き地主の多く前半紀と見られ  
格調を絶えず保つ。世下は實に遠のく  
のである。之はまた、あえて飲食の法度で  
規制するに至る。もとより人との接觸と  
を許さずして、ソリナリ、ソリナリと  
風邪と之をやうやく鳥帽よしもろの如と  
玉座と坐すたりし之下とソラハ衣被と云ふ  
之はくちいと云ふ事無く、其の如き

ノミソトヨクモトニシテハタマセバナリ  
錫湯緯。日慰アツヒニ延毛ホヘハ貌トナリモナカ  
折櫛練鍊緯。汁ヒタヒニ多シヒハ  
けりトキリ

以とく。そしもこの令とそりてアラリと自  
ら多くともへり。ハナ やもくハナ  
巧 巧 もとえ 正是 イアニミ  
不 是 フラティナイト 不 敢 不 肯 イカナ  
不 捨 他 ワヌトエー 造 化 他 ヨキ フレ  
道 理 ソノハツトエー 騙 人 ヒトシタ  
理 本意 デアレヒトエー 所 以 ソレテト 得 て 来  
エリワリ ロハ管 モノ 量 必 是 シルカタト  
キメトエー 還 好 レニテ中タヨ  
卫 フニトエー 所 ニヨリテ 今付 イヒツ  
アクラヌアリアリ 快 ハヤウクト 得 繫 ユサント  
ナ意 快 事 ナイ フリ 快 事 ナヤウナヌ  
ヨリ 不 同 ハヤウクト 得 繫 ユサント

如是言汝甚多。一詣便與流去。以至之。

○幼頤九氏歌  
代乞草紙

代乞草紙

言ふよ  
丁度、  
氣や引了

先ハ何事のとくにあつたるか考  
るのより、そぞしておひすかへそぞやうござれ、考  
の事とすてむる賤又の事

こゑの山あいを  
ゆくすまひに  
ゆきのゆき

そへ後醍醐天皇より御内侍のあらわし  
あらわしの意子の地をもて統

「うそと嘘とね、てうそと、瞼  
はまはまとまるとま」と

○春日井郡豊之場村一力松山常安寺後花園院  
永亨中明父義元禪師同墓後柏原院大  
永四年甲申當邑領主講口富之助某と云者  
亡父藏田居士此房小石尊と安せし以像八肥後河  
尻に在り之を毘首鶴摩天所彌也叙迦阿難  
迦葉三胞子溝口氏永樂一百貫文

。御ら佑神ふとて香丸のまほとせりとく  
あむすり人、鳥のむけりけり、もつてこみ比和も二言

集と又曰ふ

ちよや四半紀の凡はうれはうも  
とえをすとへるあせり  
ゆのじてひととがくえり  
本とありとて教義アヌク所をしととえ  
伊賀州のまこと入の事とくとくとく  
言ひよ御ゆきよそにてとせり  
。放場乃歎

まより秋ハコトアラシヒニシモ勢も強モノ  
是ハ春秋寛  
又々とよて對ひぬも  
モヨリあらぬものとて秋のみよ高き  
一れどもハ秋後アリ對セリとく家内久和也は  
不見

尾州寺社印年月

真清田言

中治元年三月三十六石立年

寛永十六年三月十五日

義直公

寛文五年七月廿日

嚴有院殿少業

貞享二年六月十日

涉朱下

萬德寺

久留村二十石零内五十石足分三  
年号定之

好西月七日

布トサ助

真言寺

五十三石

笠置郡下ノド村

天正二十年六月十日

弓井中勢  
徳永式ア口法師

文源元年三月五日

秀吉朱下

己二月七日

信子飯高守  
(此是ハ古方飯高候也文源元年に信子為國の支所乍年  
之信子年八月及六年)

慶長六年七月六日

元和六年九月朔日

忠吉卿即朱下

寛文七年二月十七日

義直公  
光友公

元源七年九月十九日

性海寺

大坂村百石

綱誠公

元和七年五月朔日

義直公

寛文七年二月十七日

元源七年九月十九日

改秀寺

天正十年八月廿日

信確判  
本堂清承元  
二百六十九石六斗九升

元源四年八月三日

秀吉公酒足  
忠吉公  
中務部下付内  
百石ト三

法惠寺と書

元和六年九月朔日

義直公

法秀寺と書之

寛文七年二月十七日 自以故秀寺と書之  
貞享二年十二月八日 百石少加塔

元源七年九月七日

國府宮

天正十八年九月七日 田中兵部大輔

秀文天正中納言殿山元源書所存  
うとえ之あとす

文源四年八月三日

秀吉百五十万

景長十二年十一月五日

奥津文右衛門

秀吉の御内侍

原田石馬門

元和七年二月七日

義直公

寛文七年二月十七日 元源七年九月十七日

六角堂

秀利又六郎

天正十二年九月十日

秀利又六郎

元和六年七月九日

忠吉卿

百石

寛文七年二月十七日 長光寺と書之

大吉寺 土田村

忠吉公二要文

元和十年八月十六日 志吉卿

寺中至多二方  
元和九年九月七日

元和寛文

少喜下

土田八幡 海取

泰長十二年十一月十九日

志吉公三十石

泰和六年十月十九日  
元和六年七月十九日  
元和七年七月十九日  
元和七年七月十九日

法苑寺

大承二年七月十九日遼勝

之北文也

天文二十二年九月十九日勝

謂般使

天文二年九月十九日

建性院常開

同上

同上

同上

福修院院頭者居夏石白居

志吉

元和六年七月十九日

津治天皇

西德四年四月三十日

敬

子三百九十三石六斗九合  
白居内三百三十七石五斗  
甲羽郡立井村地所

六月二十日

勾當太支

乙若左支

寛文五年七月十九日

嚴有院敬門事下

子三百九  
十三石

妙勝寺

董付

泰和六年七月十九日

津治天皇

元和六年七月十九日

元和

寛文

元和

西法寺

上宣集

五十石八斗三升七合香物川七畠六斗社内三畠六斗  
又還香塚五升七合八斗文安元年二月二年書於見

光明寺

日

慶永長十二年九月

七十石費文安寺中口町口方秀吉之役收佈  
主酒代酒文正爲多納酒代大山酒井九石

三利十二月十日元和前酒文因付之

實成寺

慶永長二年七月九日

忠吉口二十五石

元和元年元源

甚目寺

天正八年九月三日

田中參政大輔

天正十二月二十日

酒井八萬

天正九年九月廿日

多納酒庫多納秀

信確

天正九年九月廿日

根村充定信友彰之

元永四年八月三日

秀吉

年号無く

忠吉口利九月十四日トミシテ年号

致之附之元永四年四月十九日

元和六年以降至下

元和六年辛卯紀尚

間務毛利坊

信長百費

承保九年二月

文保四年十月廿二日  
慶長六年七月九日

同十二年十月十九日

元和以海以臺下他久和六年寔承七年十月贈  
宣文七 元保七

蜂須賀蓮華寺

天正八年十月八日

蜂須賀阿波守

蜂須賀源了家設移向院布施收事多也

寔長十二年十月  
元和六年以來所臺下  
無善寺

寔長十二年九月二十八日

中田八石  
吉田八石  
中田八石  
中田八石

田畠一町五反步分采十七石八斗八合ノ證文

同十五年十一月廿一日  
源井久兵衛 海野村一石源村  
は源車田成秀田口所 八反四畝五斗 實承十三年

十月十日 源井久兵衛

丸文希保行車底み鳥元保二年

野田村寔長院 春日井

文治四年八月三日

秀吉百三十七石七斗九升

承和元年七月九日

忠吉卿

元和三年八月廿八日

台德之河集下

寛永元七月廿三日義直公同十三年十一月九日大歎云  
寛文五七月十日嚴有之負亨二十六月十一日門東下

### 竜泉寺

申十月十四日

夫役九石多羅池新田竹四之产  
中地七石毛馬引石し石林房と有

元和七年九月納日

行家海市多

多羅池新田三十九石三斗

竜泉寺引石ノ河院ト有

寛文二年二月十七日 先祖乙 元承七年

正覺寺 今ノ性高院後後其源正覺寺と稱し性高院事寺

承和十一年七月十四日

忠吉乙 春日郡寺井村

元和元年九月納日

義利乙 文字院

寛文七年二月十七日正之御臺奉為性高院事

長久寺

承和十一年七月十四日

忠吉乙 春日村内

元和元年九月納日

忠吉卿 百石

清秀寺 今ノ大光院之

承和十一年七月十四日

忠吉卿 春日村内

元和元年九月納日

千石

東照宮 春日井郡田幡村牛毛村楊化日

珍祐法下

元和五年九月十七日義利乙

寛文七年二月

ナセ日以是下にハ祐多寺ト有シ元源七年同上

祐主从正保二年二月十三日以是下以代し縁

九坪平田寺

元和六年九月朔日 五十二石 以は以代く

正眼寺

天文九年七月三日 義明

春日井辛福寺丹波郡  
佐波寺村小浜村以上  
百五十支文ト云

承暦五年三月廿二日

信長

天正十年八月五日

信確

同大手年九月九日田中兵部太輔吉政

佐野寺村内  
廿七丈文ノ任  
少弟千方之

元暦四年八月三日

秀吉四十石五斗

至長六年

忠吉七石五斗

元和六年以後以是下

水野定光寺

元和八年八月十八日

義利云

春日井郡當櫛村  
百十石

寛文二年五月七日光義云

沓掛村百三十石川郡下高川村  
百七十石凡三百石云

應夢山領寄附一事

百三十石

尾列春日井郡

沓掛村

百七十石

尾列日郡

下半四川村

右所寄附の地にて有牧納レ高山者所安主  
從二位房亞相尾陽後源致云之威靈之廟  
所也寄附今至先定躬者之仍次如件云

寛文七年元源七年以是下

少松寺  
善通照寺

文通照寺

天正七年六月

信長

同十年八月十一日

信雄三十二聖文從教他  
可以是久矣

丁巳年九月七日

田中公敏大輔吉政光八月  
吉田貞里亮勝次

卷之二

海東歌是守以中也。勿內之而石也。此也。夕  
色如新多舊物也。漫於人云。主所知也。此也。  
一九三四年秋月。歌中也。二石也。主之耳。此也。又  
一九三四年秋月。歌中也。二石也。主之耳。此也。

右江伊伊原守て  
一  
為多氣也而歌之也其內雖有石子冲其聲則歌之也  
其間也其外也其間也其間也其間也其間也其間也  
今人而之名也其亦可也不也之也之也之也之也

八月廿四

通鑑

氏法  
之次

九月十四日  
游西山

卷之四  
七

夷者之百年之名

卷一百一十五

系田ちの

寺の御馬

己十二月八日 信倣前守 橋元 おとを地文

奥毛多

玉林助也

元和七年以年二百四十二石

印屋年

津園地四石

慶長十年三月御忠吉公二千石元和以年代山王

川三千石河原村

平二月十四日 無は文あらすまの若鳥 系田ちの

福宣 清八常使

元和八年七月十六日義直乙少喜乍算代、完次以八

上島神明制札元和九年十一月日 信確

天正十八年八月十六日秀吉之福宣城所賜田地一町段

名中洲元殿と云ひ 旧九月二日四中呂級少輔代文

天和六年六月御忠吉公承狀手詔御付記

寛文七年以至下荒尾村方石海多殿也夏月十四石

於合世有

退伍事元和八年二月十九日調誠之鶴屋年石

大水守六石七斗八升取分是因信勢守以年納不之

源致之送し方へとくに毛利氏は從事す下元年

元年

元和二年二石石寛文土年二月土月元和五年正月

新田村の領内引手河を又出立

元和三年年六月十八日不動念佛紙百石

新田村の領内

新田守年九月三十日

新田守年九月三十日

久昌守  
元和四年九月三十日

秀吉五郎守信守

元和六年正月

至田守の署文元和九年二月三十日

元和九年九月三十日以降

### 瑞泉守

元和九年六月三十日　秀吉不山不歸内中石  
元和九年七月九日　忠吉<sub>伊東城主</sub>不山不歸内中  
元和九年六月三十日以降

八幡美向山不山不歸内中石蓋門靈設神田家トニ

忠吉<sub>伊東城主</sub>不山不歸内中石

家院院長

元和九年十二月三十日

山室不山不和泉守吉政

忠吉<sub>伊東城主</sub>

家院院長

元和九年十二月三十日

山室不山不和泉守吉政

忠吉<sub>伊東城主</sub>不山不歸内中石

二官守制

元和九年七月八日信重

元和十年八月三日信雄元和九年四月十五日二反余

尼寺二十一所納之土石費二百文ト

之制

弘月乃有酒井久の尉忠次又一色八月ナ三日  
津田久の長武又一色十月四日酒井左衛門政  
子毛九年九月十九日二十日後九月少主余監物志重

官松経字於人中アシタマ

弘和八年二月十九日

義直公而三字六石

寛永元年九月五日酒井家宗親文東深宮家須藤家  
寛文七年以某代之社川以某年  
寂光院經鹿尾一所立及弘文年号ニ取次御前りの長武  
修造事室則以萬所現鬼賜承下アリ

天永漏八年九月二日信長公達文書  
總見寺 文漏八年八月十日秀吉中將村山秀政  
八石半之石八斗沙井酒井教也三行町内三石二斗三石  
合千三百二十石と云

至因ちあひ加多之利以年寄支十日三石トアリ

慶安六年七月九日忠吉之助郡西乡那村内三石半  
元和六年九月以某酒代之

頼文

文漏九年八月八日

秀吉丹波守秀吉九石半斗

修造酒代之據此小年号ニセキ二月四日と云アリ

寛永元年五月

義直公

天文七年以承代、自以承代寺とアリ

### 妙興寺

天文六年八月八日

秀吉二百ナセ石  
七年の年

秀文元年四月

忠吉二百石トアリ

四年七月九日以河文  
志之利三十石ト有ノ元和算代

### 曼陀羅寺

天文六年二月朔日

秀吉二百足石  
七年

無津寺を至而三刻地文一通至多シ辰ノ日

ナウヨトアリ

天文十一年十月大日真言五事本山中也此也秀吉

信秀の領主志之利三百三十石ト有ノ元和算代

### 天王坊

天文七年九月十四日瑞因淳心忠河文

買得田畠免  
洋人地

アニア名天王坊民部ヒトアリ

天文十年八月十四日信雄

買得田畠余銀三千石費文ト

信雄が近處五百石費文ト

年四月

天文十八年九月十四日共部吉政地文一通

天文十九年九月十四日共部吉政地文一通

之利物、坊以松木ノ内而要之松木ノ内

文保八年四月十四日達院常定寺地地文

秀文九年四月八日不八日長朱文有ノ元和算代

忠吉秀文ノ後半玄以之利共庭村内有ノ元和算代

八石元和九年正月入河文一色アラ名神石をト  
九月カウシテ海舟一匹アラ名波井ノモニリアリ松尾院  
殿以テ五毛ハ塔川船入とめて社ノリタツ教尊代ヲ  
ヒシツシモノ事ニテ音トシ額アキアテ各々ノノ後  
アリトアリ

文治八年八月之日 東吉 三百甲八石名神石  
元和六年九月祭奉少代レ

### 萬松寺

文治二年九月廿日 東吉 五百甲六石名神石  
元和六年九月廿日 忠吉 三百甲  
元和六年九月廿日 東吉 三百甲  
元和六年四月廿日 東吉 三百甲  
元和六年四月廿日 二萬石

### 笠寺

又云ノミナ屋敷事も、その事也。此處  
瓦版九多所行多處到、榜化水收奉及元年有  
乃一日田納合一所八久九取足力トテ、其ノ事也。此文  
曰年に月日数以復、地尾安らぬ。

高岳院 寛永二年正月五日百石自少代  
至及正年七月七日 百石半多全計頭五年

### 白林寺

百石 万治元年正月七日 諸事下

東照宮 以テ度紙二百石共、二年四月朔日 諸事下  
誓願寺 百石 元和九年正月大日 諸事下  
天王 百石 元和九年正月十八日 諸事下

元和六年以次代

沙耳

相應寺 三百石

寛永三十年七月廿四日

從二位行權

大納言朝臣源氏押自以沙代

建中寺 五百石

寛永五年五月七日 沙

樂四社人中

白 天正十八年九月十日

甲申年秋至肺

吉政

而七百文砂而文 八庄所内 之千文百二十文以沙之內

而之十號而七百文樂四內百要文於合而百要文

永祿九年十一月 信長

沙百文之 浅井守為父下

天正二年正月十日 信長

沙百文之

天正四年正月丁酉信忠同年旧時 佐多弓馬少信家

佐多弓馬少信家

ちる行し之宮所御トアラムシノ院之

四年三月信忠凡利切夏易書又子川得千秋所即

分給四度文還附上之

左ノ外洋ウタ信益

年號之

天正十年七月信雄

滿舟以鳥羽内子子夕アニ賜ル 鳥川分七百二

百文此文也每

天正十二年三月廿三日大權限沙利三百七十貫文

大官

小笠原和泉守惣一通

年號之

野並村一卿千秋、之原守

文治四年八月八日 紹吉 百五十九石五斗十斗

同时海舟於内百五十石

寽永五年七月廿四日台德院之沙參年七百十七石

丁巳年十一月九日

大勅文 沈多幸

寛文五年七月七日

巖有云所集

貞享二年六月七日

所集

祐福寺 四十石 寛文七年二月七日以身代之

岩屋觀音 天正十三年八月吉日信玄公文 田畠林波

日將 八月行村人三階充政竹村高為慶勝佐久長

安行村伊勢充成四判地文

慶長十三年八月大日行系堺坂換地狀二十石

延金寺 天正十二年九月七日 大日行系丈丈

清壽院 三十石文年五十八月七日上古清氣

文永七年八月行内高為報若日主高正安

總心寺 土石寛永十六年二月十五日敬公 小玉手

大御堂寺 文治八年八月三日秀吉 百九十四石三斗三升

寛永十五年三月十五日行基手 二百五十石

乾坤院 ナニモ百文承代臺

天文七年七月吉 御判是八傳通復敏乃多手

健宣田名助子川源

純人源田良定手

弘文院 二月二日行内高為報若

正安 三十石章代

水地和泉守頼堂入東百俵

四斗 安達 志掌耳毛毛

泰永二年八月十日

龜山寺 五斗三升

元和七年五月朔日以本所代

名送寺 八百五十文

天文五年三月八日 信元

水代下御奉之

享長十年八月吉日

行内親吉日正安二列

日十二年五月十五日

大石九斗六升佛供田地文

無は寺而至回之列

元和七年五月 以東沙代

常

樂寺 五十八石三斗七升元祐十三年六月寺ヨリ書入

家康公等沙達下 老代以家先往將紛失トシ

東龍寺 方丈村門甲十石

慶長七年六月十六日 大權次内大臣 沙奉下

元和三年七月五日 仁德之以家以代沙奉下

以復易書御代沙奉下

享長八年九月十四日百四十三石二斗八升

以と賜ん

元和二年十二月廿日仁德之百石以代沙奉下

國役免許御護列 天正十三年三月十六日

大權次賜フトコロ但免除七年九月老日 誠之

賜之

名古屋

若宮領 百石

元祐二年正月十八日始

沙奉下

教順寺 三十石元祐二年七月廿八日

沙奉下

清淨寺

大富助 四十石元祐二年十月大吉

沙奉下

宝永七年二月廿日任光御判沙奉下 賜フトノ外

知多郡大治村長惣寺御沙奉下 賜フトノ外

沙奉下

享保二年十一月十九日賜御墨

○法事の追補後押以役ハ者大政官府と之補也乃方々  
武藝法席代もと携いてい猶と云ひ一羽モ恐哉ニ  
ナニ及西宮紀帳時ノ一わ山め延任重注の傳トスモ  
ミクノトキ也と恐矣計ムレと乞捕もれ遂モ法  
使ふあまとら席ち年十二月九日の官府にも又くも  
御角絃華文同補法科也量事也簡與誅曰節量裁  
選擇之義トミラ人ノ俗アリ多と書ル也

○堀川院崩御正徳二年  
七月十九日世ノ繁アリ初仰に寛鞠仁親王  
とミモリテと謡セヨウモ章事と母房に仰りテ  
富ムミトと弑アリムヘトモアリシテ仁寛も

章も修復也流風行御中修致万葉の爲是無みじア  
リテ莫表元モ署ス仁友ハ勤めシキモヒエヌと顎ナリトは時の延宝服  
を立瓦刑に處モクシテ流セリハヒシリケイ仁鞠に  
親王ハ嘸セリスカセアモヒリニヤモハ修業成ル  
弑アリモクシモ謂立川の邪流也  
立川立川傳習作と傳として一流の狂歌と書翁稱  
うきアリ百人一首と字トキハ種々草紙と書翁之  
子に手本取るのみとナリトキモ也  
○太平記法事は承化五年中四年春荷花

不絕眞月乙酉

○ナキナタハモカの轉泊と之と更ハ雜致也 日本記三十七役ナ  
タクト列ス

心本詩三十夜後  
タクト別ス

老小氏、膏肓。此の間も在工機未引よ。其在一界し  
之爲主常使と歎。其爲中を以て入門と下  
活水小舟と。而舟とふちにふるくあり。一端子全の付  
國えハカムと繼て活水と移と二重傍因語。ハ活水の  
官也や。御之席。京國えの子とも曰。因語と云。又今と移と  
石活水と。之はの字と避名水と書  
家久八代の源吉水ノ角守家久。相馬院元之の文  
之列聖海弘平田上野の跡と上野の野移  
多氏ト。前田多良作義典に屬して歎功あり。

○之列淨云宗山西檀林云所山中以有其陣妙心與中  
游紫雲山尾列而山檀林云列也係曼玉靈雞寺於因  
祐福寺也北山之多紀列門風揚取物心於寺京  
除二所詳林寺之光明寺合西山義九所之

肉深草  
林子光明季之

○ 海云堂閣東極林丈所

光羽亭

漢金

附有

生寶

壽常蓮

經  
子

小石川  
傳度院

弘培

上  
經  
子

所  
敘  
結城

東漸寺 小倉

淨國寺 宗義

大善寺 脊山

大念寺 江戸

大光院 新田

惣隨院 神田

普選寺 鎌林

靈山寺 靈岩

灵山寺 清淨ヶ移庚

名跡名流寺 流義檀林

圓通寺 大專林

草瓶檀林 大專林

龜山流義大向深陀經寺

泉別場号迦蓮社

○龜山流義大向深陀經寺

○龜山流義大向深陀經寺

○龜山流義大向深陀經寺

○官位同多よ有ハ士位の考モ此に付テ

○官位同多よ有ハ士位の考モ此に付テ

○後多院すは禁制すを以てハも後モ  
制せよと

○多村多院多名ハ童高ト四書いそく

○今川義元神牛尾政里セモ一時御内信長駕  
九多子後一又一春敵つと山城守と至りて  
井戸田小山守源氏に御り古多海と名  
てモ子根小所あり一毛も桶足方衝八  
て駿行とね活ひ一とモいはす  
○降敷の枕沢所塞莫集名義と  
○南雲勢利高ハ  
念修と寛塔子と了西  
今火也貴少よりうきのまきとてキリケハ根の薙

東奥の記りてある所ハとて霞をもおむけ候  
モリテニサク日も月もいとセアモリの御  
事あつてゆく早丸の者追ひてつれふれりてあつて  
シトムスノトシモトシモニウミヒタケ制の  
シテハフリシテモ多シテ藍雲はとどます  
とスルヒキハキスルヒジヒトスルヒキスル  
。安東氏譜と稱するに神武天皇御子長髓彦、  
兄安・東國に通じて陸奥守安信比羅支に勅して是と  
征セリ。比羅支陸奥に引かくに山、島安  
東と云ひ一屯軍にて一軍功と至るて云

陸奥の此戸を領し賊を獲セリ。安東とハ蓋々浦に  
在る紀伊ノ後安東守良ト也。今後高致東もと元就と稱す  
アトト行  
佐野將軍也。仁明帝の時也曰弘之川即之從  
之而下熟て等阿於陸奥臣豊主等漸盛スル  
一僧院の時後後胤國東守良ト也。後源賴義比名と  
追て賴時と稱セリ。自安東將軍と名詔と  
一作安部將軍

忠頼

安東

頼良

一作忠良  
東奥

賴時

安文六郡同姓安東將軍

僧良昭

日井 盲人

良宗 安東太良後世或書安友若伊東伊彌等

貞任 厥川三郎

宗任 鳥海三郎

正任 黒沢四郎

家任 盤井五郎

重任 北浦大郎

則任 北与鳥七郎

女子 アルカーノ前

女子 伊賀十郎平永衡妻

女子 中 カーノ前

亘理權太支藤原經清妻

女子 ハヤノ前

○東照大神宮御花押の事と曰せり  
曰ことと云れ事にして迺と曰へん事と縁の辞  
氣出れ難に多る事御代項氏家説なども歴  
くの字にありを曰ひがますとゆる事なり  
御よこれぞい豫と云ひて仰きれ候と仰  
より乍ら之の事御列がりし事は多る事  
さて一筆書れえ事のち画あら御是ぞれと  
摸して沙翁押と曰へりそ後尾を御おほ  
にて今沙翁と云ふ事も少事もあつて  
代の者ひよそひある事も少事もあつて  
きてゆる事新迦の事ひと所の形像と来て

。禮と謝り、意す。モハ佛菩薩等の像の  
事とす。或の像と表して立像と坐像造る  
事。又下向を少佐佛菩薩と仰うる。是遠場觀  
こそを海に西行と觀。或ハニ摩耶形且種を  
御してゆき立坐不應以れ。傍かハ坐事と  
不立人。涅槃の日す。立人。佛像也。仰坐事  
間及上仰坐事と辨す。涅槃あり。而シ  
或問荒神供案。或の西には手を拂ひ。右之高坐事  
記せしも。多よ坐て。左の涅槃の荒神供案事  
也。蓋ゆ。父卿壽に之を有ハセ。俗寛神と  
して。多よ荒神也。と。ソニモハ後俗也。セト

半に高座を家内今。邪はり。と。ソニ瑜義經寫  
アシテ。是毘耶伽<sub>設大聖</sub>。觀喜天の如来障礙神。一に荒神と  
移。これ大憲怒。如來との二像。一切法の障礙者  
也。所以。其如來降伏。多事。亦。家比大事。これ  
寛神に非。セ。金剛薩埵。多事。也。ト。ソニ  
多と荒神。得。と。是。ハ。寛神。得。多。也。ト。ソニ  
荒神。得。ト。加王。也。也。也。也。也。也。  
。摩利支天の像。今。世。也。也。也。也。也。也。也。  
。洋と圓鏡。一。獨多。と。洋。也。也。也。也。也。也。也。

像に坐す或ハ輪ありと御す事もあらず又片にて定すを  
以テシラズとモ勝れまゝやうにしてすとしと云ふ者へ  
と歌ふ。トモ之少也度はぬ流傳也の儀軀乃  
像ハ形扁てサニテ明王夜叉歎あん此度也  
耶形ハ圓扁也

不空羂索小觀音の三尊也耶形ハ羂索小半そ  
像ハ葉蓮花中の汝月變して一井とひく二面  
にて白色宝冠に白足陀佛を載けミチ身  
一方多宝佛サニの多念珠ノル身の多司鑿  
瓦寺ニの多羂索と勢より身に鹿皮と既て  
毛衣着ヒテ一枝天珠者多ナ

南都鷦鷯寺南田室に安置すあれ像ハ有  
八臂也シハ弘ほ右脚をすらりと列ふは又の様也  
又六臂あり右の上錫杖トハ劍たれとせ見下ハ  
胸氣印ハ牛ハ合掌也

又二臂あり儀軀かうて同一頭也實多の事也  
ハ二臂也

馬頭觀音八臂也墨あり御庵尼觀音也の洞像  
ハ二臂也

千年觀音も亦墨像也。法華寺の像也千の  
外又よ一佛と捧也

北嶺石牛湯林と號シテも中也度はぬ流傳也

軌引くいひあり後右ハ施無裏せむり比下ひしも又ハ吉陽よしやとねゼ  
大黒天だいこくてん神額じめつ小帽こぼうとと御ご右のゆ桃印瓦ももいんわと夢蓑ゆめあわ  
と被かぶる代きに麻まも荷葉はぢありありををひもひもに機きと組くみと集しゆ  
家いえセ布衣ふいすれ縫ぬいと  
ひねり

辨才天べんざいてんハ右鑰ひだりのあさ日本にほんの毛けたと仰章おひらきと桃ももと富貴ふき

